

自己認識方途としての社会的比較の位置

— 日本人大学生に見られる特徴 —

高 田 利 武 *

The status of social comparison as a mean of self-recognition
— Some findings about Japanese college students —

Toshitake TAKATA

要 約

青年期の自己認識の形成過程における社会的比較の役割を探ることを目的とし、研究Ⅰでは Schoeneman (1981) に準拠した技法、研究Ⅱではそれに Suls & Mullen (1982) の技法を加味した手法を用いて、大学生の用いる自己認知の方途を質問紙により調査した。その結果、(1)自己観察が最も用いられる方途であり、社会的比較はそれに次ぐものであること、(2)自己認識の肯定的側面では他者を手がかりとする方途、否定的側面では自分自身を手がかりとする方途が用いられる傾向があること、の2点が双方の研究から明らかとなった。これらの点に関して、自己認識方途における文化的要因、および、社会的比較の概念の再吟味の必要性が論議された。

問 題

自己概念 (self-concept) あるいは自己認識 (self-recognition) がどのようにして形成されるかについて、これまでに多くの論考がなされている。高田 (1992) はそれらを整理し、従来の諸説が重視する自己認識の手がかりは、以下の4つに大別されるとしている。すなわち、(1)事物 (物理的環境からフィードバック (White, 1959) など)、(2)自分自身 (自分の行動やその決定要因の自己観察 (Duval & Wickland, 1972; Bem, 1972)、過去の自分との比較 (Albert, 1977) など)、(3)他者 (他者からの直接・間接の社会的フィードバック (Cooley, 1902; Mead, 1934)、他者との比較 (Festinger, 1954)、他者との同一視 (Bandura, 1977) など)、(4)集団 (自分の属する集団と他の集団との比較 (Tajfel, 1978) など) である。

これらの自己認識の形成過程における他者との比較 (社会的比較) の役割ないし位置について、従来いくつかの理論的考察が行なわれるとともに実証的資料が集積されている。例えば、Suls & Mullen (1982) は、社会的比較の重要性に関する生涯発達モデルを提唱している。それによると、自分と同年齢の他者との比較を通じて自己評価を行なう傾向は、青年期に最も

著しいと言う。類似した他者との比較が正確な自己評価をもたらすことを理解する認知能力の発達と、学校生活で同年齢の他者と接触する機会が多いことがその背景にある。アメリカ人の青年から老人に対する横断的調査の結果は、このモデルとはほぼ一致するものであった (Suls, 1986)。わが国でも、大学生と30代から50代の成人に対する横断的調査で同様な結果が得られている (高田, 1991; 1993)。

しかしながら、これらの知見は青年期の自己認識における類似他者との社会的比較の重要性を無条件に意味するものではない。何故なら、自分と類似した他者との比較、類似しない他者との比較、過去の自分と現在の自分との比較 (縦時的比較) という3つの自己認識方法に限って、調査対象者にそれを用いたか否かを評価させる、という方法が用いられているからである。実際、Schoeneman (1981) は大学生を対象にして、社会的比較、社会的フィードバック、自己観察の3方法の自己認識形成における相対的重要性を調査している。それによれば、圧倒的に用いられているのは自己観察であり、社会的比較はこの3つのうちで最も利用される割合が低いという結果が示されている。

一方、自己認識の過程における社会的比較の相対的重要性を決定する要因としては、上述した発達の要因の他にも、自己認識の内容と構造 (自己概念の安定性: Morse & Gergen, 1970、自己概念を構成する側面: 高田, 1993) や文化的側面 (高田, 1993) などが指摘されている。したがって、これら諸要因の相互関係について、さらに検討を重ねる必要がある。

そこで、青年期の自己認識における社会的比較の重要性の一般的妥当性と、それに影響を及ぼすいくつかの要因に関して、実証的検討を加えることが本稿の目的である。研究Ⅰでは、自己認識における社会的比較の役割に関する資料を、Schoeneman (1981) の技法を用いて収集し、(1)青年と成人の相違、(2)自己概念の肯定的側面と否定的側面による相違、(3)自己概念の安定性による相違、を検討する。その結果を受けた研究Ⅱでは、Suls & Mullen (1982) の手法による結果とSchoeneman (1981) の技法による結果との関係を調べるとともに、文化的側面に関連する要因を検討する。

なお、児童期から成人期への過渡期である青年期の年齢範囲を明確に規定するのは困難であるが、ここでは12歳前後からの約10年を青年期として捉える一般的見解に従い、青年後期にあたる大学生に焦点をあてた。

研究Ⅰ¹⁾

方法

調査対象者: 青年 (レンジ19歳~22歳、平均年齢19.9歳) は、地方国立大学生151名 (男性66名、女性85名)、成人 (レンジ33歳~54歳、平均年齢38.7歳) は地方公務員・看護婦を対象とする112名 (男性64名、女性58名) である。講義および研修の席上で、以下の質問紙に集団で一斉に記入を求めた。

質問紙: 以下の1~3の内容を含むものである。

1. 肯定的形容詞・否定的形容詞各75個の中から、自分にあてはまるものをそれぞれ5個計10個選択する。これらの形容詞は、加藤 (1977) に準拠した。なお、あてはまるものがない場合は各5個以下でも可とした。

2. 自分が選択した形容詞のような特性を持つと自覚するようになった主な理由を、(1)自己観察 (自分自身の行為・思想・感情や、それらが起こった状況を自ら振り返って)、(2)社会的フィードバック (他の人が私に対して直接・間接に言うことや、私に示す反応を通じて)、(3)

社会的比較（自分の行為や意見を他の人と比較して）、の中から1つ選択する。3つの選択肢とそのワーディングは基本的にはSchoeneman (1981)に準拠したものである。これを前段で選択した10個の形容詞のそれぞれについて行なう。

3. 選択した5つの肯定的特性および否定的特性について、それらが互いにどの程度調和していると思うか、および、肯定的特性全体と否定的特性全体が互いにどの程度調和していると思うかを5段階評定する。これはMorse & Gergen (1970)に準拠し、自己概念の安定性を見るものである。

結 果

青年と成人との比較：自分自身にあてはまるとして選択された特性の合計（4～10個）に対し、「自己観察」「社会的フィードバック」「社会的比較」のそれぞれが占める割合を各調査対象者毎に算出した。この平均選択率を年齢・男女別に示したのが表1（a欄）である。大学生についてこれらの選択率を見ると、男女を一括した全体の平均値間には有意差があり（繰返し要因を含む分散分析で、 $F(2,148) = 99.23$ $p < .001$ ）、他の2つより「自己観察」が用いられる割合が高い。しかし、この「自己観察」50.2%、「社会的フィードバック」23.6%、「社会的比較」26.2%という数値は、Schoeneman (1981)の報告しているアメリカ人大学生の結果（「自己観察」70.2%、「社会的フィードバック」18.8%、「社会的比較」10.7%）と明らかに傾向を異にする。

さらに、年齢と性別の効果を見るため、2（年齢）×3（性別）×3（自己認識方法）の分散分析（自己認識方法は繰返し要因）を実施したところ、自己認識方法の主効果が有意（ $F(2,532) = 108.53$ $p < .001$ ）であるが、他の主効果・交互作用はすべて有意ではなかった。すなわち、一般に自己認識方法として「自己観察」が最も用いられており、その傾向に年齢差・性差は見られない。この結果は、類似した他者との社会的比較は成人期より青年期に多いという知見（Suls, 1986; 高田, 1991:1993）とは一致しない。

肯定的側面と否定的側面の相違：自己認識の肯定的側面と否定的側面とで、3つの方法の選択率が異なるか否かを検討するため、選択された特性の合計における選択率を肯定的側面の選択率と否定的側面の選択率とに分割して示したのが表1（b・c欄）である。これに対して、2（年齢段階）×2（性別）×3（自己認識方法）×2（自己認識側面）の分散分析（自己認識方法・自己認識側面は繰返し要因）を実施した。その結果、自己認識方法×自己認識側面の交互作用が有意であった（ $F(2,532) = 59.25$ $p < .001$ ）。すなわち、自己認識の否定的側面では「自己観察」が多く選択されているのに対し、肯定的側面では選択が減少し、「社会的フィードバック」の選択が多い。なお、年齢と性別を含む相互作用はすべて有意ではなく、したがって上記の傾向に成人・青年あるいは男女による相違は見られない。

自己概念の安定性の影響：自己概念の安定性が自己認識方法に及ぼす影響を検討するため、自己認識の3方法の選択率3種（肯定的側面の選択率、否定的側面の選択率、選択された特性の合計における選択率）計9変数のそれぞれを従属変数とし、安定性の3指標（肯定的特性間の調和、否定的特性間の調和、肯定的特性全体と否定的特性全体との調和）、年齢、性別の5変数を独立変数（後2者はダミー変数）とした重回帰分析を各従属変数毎に実施した。しかし、自己概念の安定性の影響はいずれの従属変数においても全く見られなかった。一方、自己概念の安定性の3指標のそれぞれについて、2（年齢）×2（性別）の分散分析を実施したところ、肯定的特性間の調和と肯定的特性全体と否定的特性全体との調和では、青年は成人より安定性が低い傾向が見られた（それぞれ $F(1,261) = 3.30$ $p < .08$; $F(1,261) = 2.62$ $p = .10$ ）。

これは青年期の自己概念は不安定であるという従来の所説（例えば、加藤、1977）に合致する結果である。

表1 各方途の平均選択率

	a. 全 体			b. 肯定的特性			c. 否定的特性		
	自己 観 察	社会的 フィード バック	社会的 特 性	自己 観 察	社会的 フィード バック	社会的 特 性	自己 観 察	社会的 フィード バック	社会的 特 性
成人男子 (n=64)	47.6	22.1	30.4	41.4	31.3	27.4	54.8	12.2	33.1
成人女子 (n=58)	51.9	18.4	30.2	42.3	27.2	30.5	62.1	9.8	28.1
平 均	49.6	20.3	30.3	41.8	29.4	28.9	58.3	11.1	30.7
青年男子 (n=66)	49.3	23.1	27.6	39.9	31.7	28.4	59.3	14.4	26.3
青年女子 (n=85)	50.9	24.1	25.0	41.0	34.8	24.2	61.1	12.7	26.2
平 均	50.2	23.6	26.2	40.5	33.4	26.0	60.3	13.4	26.2

数値は3方途のそれぞれが選択された%

考 察

以上に見た研究Ⅰの結果には、さらに検討を要する2つの問題点が含まれていると思われる。その第一は、自己認識方途の相対的重要性を測定する際の方法上の問題である。すなわち、大学生が最も用いている自己認識方途は、Schoeneman (1981) の報告と同じく「社会的比較」よりも「自己観察」であった。これは、限定された選択肢の中での社会的比較の優勢を示した Suls & Mullen (1982) の技法による従来の知見（高田、1991;1993）とは異なる。したがって、青年期の自己認識において社会的比較の果たす役割を十全に検討するためには、Suls & Mullen (1982) と Schoeneman (1981) の双方の手法を同時に比較検討し得る方法が必要とされよう。研究Ⅱは、そのような手法を用いて行なわれる。

第二は、自己認識方途の文化差に関する問題である。本研究は Schoeneman (1981) とほぼ同一の方法によって行なわれたが、アメリカにおける原研究とはかなり異なった結果が得られた。厳密な意味での比較研究ではないため確定的な結論は勿論言えないが、日本人大学生はアメリカ人大学生と同じく「自己観察」を最も選択してはいるものの、「社会的フィードバック」や「社会的比較」の選択率がアメリカ人大学生よりも高く、他者が関与する自己認識の方途への依存が相対的に高い傾向がうかがわれる。

また、類似他者との社会的比較による自己認識は成人期になると減少するという従来の知見（高田、1991;1993）とは異なり、「社会的比較」の選択率に青年と成人との間の差異はなかった。本研究の「社会的比較」の選択肢は比較他者の類似・非類似は区分していない。したがって、他者との類似の程度を問わない社会的比較が自己認識に影響を持つ点において、日本人の場合、成人も青年と変わらないことを示唆していると考えられるであろう。

さらに、「自己観察」が選択されるのは自己の否定的側面で顕著であるのに対し、自己の肯定的側面ではそのウェイトは下り、「社会的フィードバック」選択率が相対的に上昇している。これは、日本人にあっては、自己の否定的側面の認識は自己省察を通じて内面的に捉えられる部分が多いのに対し、自己認識の肯定的側面—自己価値は他者からの影響に規定されがちなことを示唆しているとも考えられる。このように、自己認識の過程における文化的要因が、研究Ⅰの諸結果にかなり影響していると思われる。

そこで、研究Ⅱでは、自己の文化差に関する Markus & Kitayama (1991) の独立的自己理解 (independent construal of self) と相互依存的自己理解 (interdependent construal of self) の概念を導入し、この2つの自己理解の様態と自己認識方途との関連について検討を加える。独立的自己理解は、個人はそれぞれ他者から分離しており、自己は自律的で独立しているという考え方で、欧米文化に多く見られる。相互依存的自己理解は、個人は互いに結びついていて個別的ではないとする考え方で、日本をはじめアジアの文化に多く見られる。同時に、それぞれの文化内においても2つの自己理解のいずれかが優勢である程度には、個人差があるとされる。

高田 (1993) は、日本人大学生の中でも相互依存的自己理解が優勢である者は類似他者との社会的比較を多用することを、Suls & Mullen (1982) の手法を用いて実証している。しかしながら、この技法を用いた研究結果の制約は上述したとおりである。したがって、研究Ⅱにおいては、Schoeneman (1981) と Suls & Mullen (1982) の双方の手法を比較し得る方法を用いて、自己理解の相違と自己認識方途との関連を検討することを試みる。

研究Ⅱ

方法

調査対象者：私立大学生216名（男子186名、女子30名：レンジ19歳～22歳、平均年齢19.9歳）に対して、講義の際に相互依存—独立的自己理解尺度の記入を求めた。その結果に基づき、相互依存的自己理解が優勢な者31名（男子22名、女子9名）、独立的自己理解が優勢な者24名（男子20名、女子4名）を選抜し、自己認識方途測定質問紙への回答を求めた。

質問紙：1. 相互依存的—独立的自己理解尺度。高田 (1993) に報告されているものであり、相互依存的・独立的各20項目、合計40項目からなる。質問項目の具体的例は表2を参照されたい。

2. 自己認識方途測定質問紙。研究Ⅰで用いた質問形式と Suls & Mullen (1982) の技法を折衷したものである。すなわち、選択した肯定的形容詞・否定的形容詞計10個の特性について、それぞれの認識事由の回答を求めるが、その際、研究Ⅰにおける選択肢のうち、社会的比較を比較他者の類似度によって以下の(3)～(5)に分割し、さらに(6)を加えた。したがって、(1)自己観察、(2)社会的フィードバック、(3)類似した他者との比較（自分と同年齢の人と自分自身を比較して）、(4)やや非類似な他者との比較（自分より多少歳の違う人と、自分自身を比較して）、(5)かなり非類似な他者との比較（自分よりかなり歳の違う人と、自分自身を比較して）、(6)縦時的比較（以前の自分自身と今の自分自身を比較して）、の計6個の選択肢から1つを選択する。

結果と考察

調査対象者の選抜：まず、相互依存的—独立的自己理解尺度各20項目毎に、項目全体の平均

値によってそれぞれ上位群と下位群とに分割し、各項目の平均値の群間t検定を行なうことによって項目分析を実施した。その結果、2項目において有意差が見られなかったため²⁾、これを除外した合計38項目の評定値に対して因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行なった。その結果、表2に示す8因子解を得た。これらのうち、第1・4・5・7因子は相互依存的、第2・3・6・8因子は独立的自己理解に属すると解釈される。

これらの8因子は高田(1993)で得られた結果とほぼ同様である一方、各因子に含まれる項目や因子負荷量には若干の相違が見られる。また、項目分析において除外項目が出た点も異なる。したがって、この尺度の信頼性に関してはなお今後の検討を要する部分があると思われるが、今回はこの因子分析の結果に基づいて、調査対象者の選択を行なった。すなわち、相互依存的および独立的自己理解各4因子のそれぞれについて、その因子に含まれる質問項目の平均値を調査対象者毎に算出し、因子得点とした。つぎに各因子毎に、その平均値に基づいて調査対象者を上位得点者と下位得点者に分割した。その結果、相互依存的自己理解の4因子のうち3つ以上で上位得点者、独立的自己理解の4因子のうち3つ以上で下位得点者であった者を相互依存的自己理解が優勢な者として選抜した。同様に、独立的自己理解の3因子以上で上位得点者、相互依存的自己理解の3因子以上で下位得点者であった者を独立的自己理解が優勢な者とした。

自己認識方途の選択率：選択された特性の合計(6~10個)に対する各選択肢の占める割合の平均を、それぞれの自己理解が優勢である者別に示したのが表3(a欄)であり、双方の自己理解を平均した全体の結果も表に示すとおりである。2(自己理解)×6(自己認識方途：繰り返し要因)分散分析の結果、自己認識方途の有意な主効果が見られる($F(5,265)=60.36$ $p<.0001$)。すなわち、ここでも「自己観察」が用いられる割合が最も高く(42.6%)、「類似他者との社会的比較」はそれに次ぐものでしかない(30.0%)。

さらに、広義の自己観察に含まれる「継続的比較」を「自己観察」にまとめ、社会的比較に関する3つの選択肢を合同すると、選択率は「自己観察」46.9%、「社会的フィードバック」19.9%、「社会的比較」33.2%となる。これは、「自己観察」50.2%、「社会的フィードバック」23.6%、「社会的比較」26.2%という研究Iの結果と有意差はなくほぼ等しい。したがって、自己認識の方途を測定する方法としては、Schoeneman(1981)の技法の方が一般性を持ち、相対的に最もよく用いられる方途は日本人大学生においても自己観察である、と結論づけられよう。

自己理解の様態と自己認識側面による相違：分散分析の結果、自己理解に関しては主効果、交互作用ともに有意ではなく、自己理解の様態による自己認識方途の違いは見られない。これは、相互依存的自己理解が優勢な者は類似他者との社会的比較を多用するという知見(高田, 1993)とは異なる。

つぎに、自己認識の肯定的側面と否定的側面とに分けて各方途の選択率を示したのが表3(b・c欄)である。これに対して、2(自己理解)×6(自己認識方途)×2(自己認識側面)の分散分析(自己認識方途・自己認識側面は繰り返し要因)を実施した。その結果、自己認識方途×自己認識側面の交互作用が有意であった($F(2,265)=59.25$ $p<.001$)。すなわち、自己認識の否定的側面では「自己観察」の選択は多いが「社会的フィードバック」の選択は少なく、逆に肯定的側面では「社会的フィードバック」が多く「自己観察」は少ないという、研究Iと同様な傾向が認められる。

さらに、自己理解×自己認識方途×自己認識側面の交互作用も有意であり($F(2,532)=59.25$ $p<.001$)、自己認識の否定的側面でのみ、自己理解×自己認識方途の交互作用が有意

表2 相互依存的一独立的自己理解尺度の因子分析

因 子	項 目	因子負荷量
1. 評価懸念 (6.93 18.2%)	他者の評価を気にする	.860
	他者の視線が気になる	.849
	他者との地位や相対関係が気になる	.633
	迷いやためらいを感じ、実行に移せない	.580
2. 個性の認識・主張 (3.27 8.6%)	自分の意見はいつもはっきり言う	.781
	いつも自信を持って発言し、行動している	.684
	常に自分の意見を持つようにしている	.589
	自分の性格を容易に言うことができる	.509
	常に自分が何をしたいのか分かっている	.444
	自分の所属集団の仲間と意見が対立することを避ける	-.398
3. 独 断 性 (2.40 6.3%)	自分の信じることを守り通す	.760
	自分で考えたのが最良の決断である	.729
	他者が自分の考えを何とのおうと気にしない	.637
	自分の考えや行動が他人のそれとは違っていても気にならない	.476
4. 集団への依存 (1.93 5.1%)	単独行動より集団行動のほうが好きだ	.759
	集団であれば一人ではできないようなこともやれる	.641
	個人では控え目だが、集団だと積極的になれる	.635
	他人に頼るのは好きではない	-.562
	自分一人で物事の決断をする	-.439
5. 情緒的結合 (1.64 4.3%)	人から好かれることは大切である	.655
	家族の一人に起きた問題は、家族全体に係わる問題だと感じる	.645
	他者の期待に自然と自分を合わせてしまう	.616
	仲間の中で和を維持することは大切だと思う	.609
	他者の同意が得られなければ考えを変える	.415
6. 利己主義 (1.52 4.0%)	集団のために自分の利益を犠牲にはしない	.682
	仲間の望むように振る舞うのが大切だとは思わない	.667
	他者の好感を得るために、意見ややり方を変えたりはしない	.454
	他者の期待によって行動や考えを左右されない	.453
	人と意見が対立したとき、相手の意見を受け入れることが多い	-.399
7. 他者・状況への順 応 (1.43 3.8%)	どう感じるかは他者や状況によって変わる	.708
	どう振る舞うかは他者や状況で決まる	.654
	相手や状況で態度や行動を変える	.511
	自分は自立していると思う	-.464
8. 他者への配慮の欠 如 (1.30 3.4%)	人や状況に合わせて自分の行動を変えるのは困難に感じる	.634
	見知らぬ土地は行くと気ままな振る舞いをする	.627
	関係のない他者に対しては気ままに振る舞う	.527

() 内は固有値および寄与率

表3 各方途の平均選択率

a. 特性全体

	自己観察	社会的 フィード バック	類似した 他者との 比較	やや非類 似な他者 との比較	かなり非 類似な他者 との比較	継時的 比較
独立的自己理解が 優勢な者 (n=24)	42.6	23.8	34.8	1.8	0.4	5.1
相互依存的自己理解が 優勢な者 (n=31)	42.4	15.3	26.5	3.0	1.0	3.3
全 体	42.6	19.9	30.0	2.6	0.8	4.2

b. 肯定的特性

	自己観察	社会的 フィード バック	類似した 他者との 比較	やや非類 似な他者 との比較	かなり非 類似な他者 との比較	継時的 比較
独立的自己理解が 優勢な者 (n=24)	40.0	27.4	30.8	0.8	0.0	6.7
相互依存的自己理解が 優勢な者 (n=31)	33.9	21.7	30.3	2.6	1.3	4.5
全 体	36.6	24.8	30.4	2.1	0.7	5.7

c. 否定的特性

	自己観察	社会的 フィード バック	類似した 他者との 比較	やや非類 似な他者 との比較	かなり非 類似な他者 との比較	継時的 比較
独立的自己理解が 優勢な者 (n=24)	46.1	19.6*	38.3*	3.1	0.8	3.3
相互依存的自己理解が 優勢な者 (n=31)	52.3	8.3	21.8	3.4	0.8	2.1
全 体	50.1	14.4	28.9	3.2	0.8	2.6

数値は各方途のそれぞれが選択された%

*相互依存的自己理解が優勢な者より有意 ($p < .05$) に選択率が高いことを示す。

であった ($F(5,265) = 2.60$ $p < .05$)。すなわち、相互依存的自己理解が優勢な者は独立的自己理解が優勢な者より、「自己観察」の選択が多く、「社会的フィードバック」と「類似他者との社会的比較」が少ない。特に後2者には有意な差がある(それぞれ $t(53) = 2.15$, $t(53) = 1.99$ $p < .05$)。相互依存的自己理解が優勢な者に「類似他者との社会的比較」の選択が少ないことは、高田(1993)の知見とは全く逆の結果である。しかしながら、この結果は自己認識の否定的側面で「自己観察」の選択が多く「社会的フィードバック」の選択は少ないという上述した傾向は、相互依存的自己理解が優勢である者に著しいことを示すものでもある。

全体的考察

研究Ⅰ・Ⅱに共通して得られた、本研究において着目すべき結果として、つぎの2点が挙げられる。

1. 日本人大学生においても、アメリカ人大学生より少ない傾向はあるとはいえ、最も利用される自己認識方途は「自己観察」であること。

2. 「社会的フィードバック」や「社会的比較」などの他者を手がかりとする方途は自己認識の肯定的側面、「自己観察」すなわち自分自身を手がかりとする方途は自己認識の否定的側面で用いられがちであること。

第一の点に関しては、選択肢として「自己観察」を含む測定法を用いた場合は一貫して自己観察の選択頻度が最高であったことから、類似他者との社会的比較が青年期に圧倒的に優勢であることを示す従来の知見(高田, 1991; 1993)は、Suls & Mullen (1982)による測定法を用いた影響が大きい可能性がある。さらに、個人間および個人内の「比較」という過程を考察の中心にしたSuls & Mullen (1982)の理論的考察自体が、一般的な自己概念形成過程に関する発達モデルとしての妥当性を持つかについては疑問の余地が残されよう。

第二の点については、このような傾向が相互依存的自己理解が優勢な者に殊に見られたことから考えて、自己の肯定的側面は他者を主な手がかりとして認識されることが日本文化における自己のあり方の一つの特徴であるという推論が、ある程度裏づけられたと言える。しかしながら、否定的側面に内省的に目を向けがちである一方、自他の比較に敏感で世間一般の水準に達していないと自己に対して否定的評価をなしがちなのも、同じく日本人の自己の特質であるという見解がある(南, 1983)。この2つの傾向の相互関係や、今回の結果に後者の傾向が現われていない原因に関しては、現段階では結論を下すことはできない。

これらの問題も含め、自己認識方途としての社会的比較の位置、就中、日本文化あるいは青年期におけるそれを闡明するためには、社会的比較という概念自体に関して今後さらに検討を加える必要があると思われる。すなわち、従来の実験的研究での操作や理論的考察における用法を通覧すると、社会的比較という概念は単に他者を参照するという意味で用いられ、多様な内容を含んでいることが分かり、厳密には以下のような異種の下位様態があると言える。

1. 対比：自分と他者を対比して位置づけるという他者の参照のし方を意味しており、Festinger (1954)に始まる本来の伝統的な意味の比較はこれを指すものと理解される。対比的方向づけ (contrast; Mettee & Smith, 1977)、比較過程 (comparison process; Tesser & Campbell, 1983)、区分傾向 (discrimination; Rijsman, 1983)などの用語はその例である。

2. 同化：自分を他者と同一視するものであって、対比とは対照的な様態である。同化的方向づけ (identification; Mettee & Smith, 1977)、反映過程 (reflection process; Tesser

& Campbell, 1983)、同化傾向 (assimilation; Rijsman, 1983) はこれにあたる。Tesser & Campbell (1983) の自己評価維持モデル (self-evaluation maintenance model) では、これは社会的比較とは異なる過程として論じられている。しかし、従来、優れた他者との同一視は、自己高揚的な比較の一形式として数えられているものである (Latané, 1966)。

3. 代理体験: Smith (1984) が新奇な議題における能力評価に関して取上げている、他者をモデルとしてその判断や行動を取り入れるものであるが、Smith (1984) はこれを厳密には社会的比較には含まれないとしている。しかし、この他者参照様態を社会的比較と見なして行なわれた実験の研究も数多く見られる (例えば、Stotland & Cottrell, 1961)。

4. 投影: 自分の態度などの特性・状態を他者に投影するものであり、Gerard & Olive (1987) はこれを社会的比較の1形態として論じている。

5. 反映的評価: 他者の眼に映った自分の姿の推断を通じて、自己認識を形成する過程である。Jones & Gerard (1967) は、自分の行動の準備のために他者から情報を得る過程の中に社会的比較があるが、これには自分の立場を明らかにする比較的评价 (comparative appraisal) と、自分の立場の他者に対する印象を推断する反映的评价 (reflected appraisal) とがある、としている。すなわち、これは社会的フィードバックに他ならない。これについては、社会的相互作用の中での自己形成の機制として、Cooley (1902) 以来の伝統を持つにも拘らず、社会的比較との関連については十分に検討されていないという指摘がある (Coethals, 1986)。しかし一方、反映的评价も社会的比較の1つの形態と見なす見解がある訳である。

このように考えると、何等かの形で他者を参照して自己が認識される過程は、広い意味での社会的比較と総称し得るであろう。すなわち、周囲の他者との社会的相互交渉の中で、さまざまな形で自己を認識するメカニズムとして社会的比較は位置づけられる。したがって、今回の研究で用いた自己認識方途の選択肢のうち、「社会的フィードバック」は広義の社会的比較に含まれる一方、「社会的比較」の選択肢には多様な意味が含まれ、そのいずれに調査対象者が反応したかは必ずしも明らかではない。

一つの可能性として、相互依存的自己理解が優勢な者は「社会的比較」を主に同化や代理体験として捉える一方、独立的自己理解が優勢な者は対比として捉えがちな傾向は想定し得るであろう。さらに、質問紙に直面してあらためて自己認識の否定的側面を評価する際には、それが自己にとっていずれかと言えは苦痛な体験である故に、通常用いる方途は回避されることはあり得る。そうだとすれば、「社会的比較」や「社会的フィードバック」の選択肢を、相互依存的自己理解が優勢な者は対比的に捉えてこれを否定し、独立的自己理解が優勢な者は同化あるいは代理的に捉えてこれを肯定したと解釈することは可能である。勿論、以上は現段階では全くの推論に過ぎない。今後は、「比較」がどのような意味で受けとめられているかを実証的に明らかにすることにより、さらに検討を加えることが必要とされよう。

引用文献

- Albert, S. 1977 Temporal comparison theory. *Psychological Review*, 84, 485-503.
- Bandura, A. 1977 *Social Learning Theory*. Prentice-Hall.
- Bem, D. 1972 Self-perception theory. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol.6. Academic Press. Pp.1-62.
- Cooley, C. 1902 *Human Nature and the Social Order*. Chas. Scribner's Son.
- Duval, S. & Wickland, R. 1972 *A Theory of Objective Self Awareness*. Academic Press.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117-140.
- Gerard, H.B. & Olive, R. 1987 The dynamics of opinion formation. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol.20. Academic Press. Pp.171-202.
- Goethals, G.R. 1986 Social comparison theory: Psychology from the lost and found. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 12, 261-278.
- Jones, E. & Gerard, H. 1967 *Foundations of Social Psychology*. Wiley.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ No.14.
- Latané, B. 1966 Studies in social comparison: Introduction and overview. *Journal of Experimental Social Psychology*, Supplement 1, 1-5.
- Markus, H. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Mead, G. 1934 *Mind, Self, and Society*. University of Chicago Press.
- Mettee, D. & Smith, G. 1977 Social comparison and interpersonal attraction: The case for dissimilarity. In J. Suls & R.L. Miller (Eds.) *Social Comparison Processes*. Hemisphere. Pp.69-101.
- 南博 1983 日本的自我. 岩波書店.
- Morse, S. & Gergen, K.J. 1970 Social comparison, self-consistency and the concept of self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 148-156.
- Rijsman, J. 1983 The dynamics of social competition in personal and categorical comparison-situations. In W. Doise & S. Moscovici (Ed.) *Current Issues in European Social Psychology*. Vol.1. Cambridge University Press. Pp.279-312.
- Schoeneman, T. 1981 Reports of the sources of self-knowledge. *Journal of Personality*, 49, 284-294.
- Smith, W.P. 1984 Judgemental goal in the social comparison. *Representative Research in Social Psychology*, 14, 36-51.
- Stotland, E. & Cottrell, N.B. 1961 Self-esteem, group interaction, and group influence on performance. *Journal of Personality*, 29, 273-284.
- Suls, J. 1986 Comparison processes in relative deprivation: A life-span analysis. In M. Olson, C.P. Herman, & M.P. Zanna (Eds.) *Relative Deprivation and Social Comparison*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.95-116.
- Suls, J. & Mullen, B. 1982 From the cradle to the grave: Comparison and self-evaluation across the life-span. In J.Suls (Ed.) *Psychological Perspectives on the Self*, Vol.1. Lawrence Erlbaum Associates. Pp.97-125.
- Tajfel, H. 1978 Social categorization, social identity and social comparison. In H. Tajfel (Ed.)

Differentiation between Social Groups. Academic Press.

Tesser, A. & Campbell, J. 1983 Self-definition and self-evaluation maintenance. In J. Suls and A. Greenwald (Eds.) *Psychological Perspectives on the Self. Vol. 2.* Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 1-31.

高田利武 1990 自己認識方途としての社会的比較の位置 日本グループ・ダイナミクス学会第38回大会発表論文集、77-78.

高田利武 1991 社会的比較：その発達過程 三隅二不二・木下高雄(編) 現代社会心理学の発展II ナカニシヤ出版 Pp. 96-119.

高田利武 1992 他者と比べる自分 サイエンス社

高田利武 1993 青年の自己概念形成と社会的比較 -日本人大学生にみられる特徴- 教育心理学研究, 41, 339-348.

White, R. 1959 Motivation reconsidered: The concept of competence. *Psychological Review*, 66, 297-333.

注

- 1) 本研究は日本グループ・ダイナミクス学会第38回大会において、その概要を発表したものである(高田, 1990)。
- 2) 除外した項目は、「決断をするときには、自分自身にどのように影響するかを考える前に他の人にどういう影響を及ぼすかを先ず考える」「自分はユニークであると思う」の2項目である。
- 3) 各因子の平均値はつぎのとおりである。第1因子: 2.99、第2因子: 3.68、第3因子: 3.49、第4因子: 4.01、第5因子: 2.83、第6因子: 4.01、第7因子: 3.47、第8因子: 4.57。いずれも7段階評価(1~7)、中立点4.00で、数値が小さいほどその因子内容を肯定する程度が大きい。

Abstract

In order to clarify the status of social comparison as a mode of self-knowledge formation in adolescence, two survey researches were conducted. College students were asked to indicate what standards they used to evaluate themselves: (a) self-observation, (b) social feedback, (c) social comparison, using the Schoeneman (1981) type questionnaire (Study I), or the modified Suls & Mullen (1982) type questionnaire (Study II). In both studies, it was found that (1) self observation was the most preferred mode, and (2) it was especially used in the evaluation of the negative aspects of self, whereas another two modes were used by respondents for the evaluation of the positive aspects. Two implications of these results, the cultural factors regarding acquisition of self-knowledge and the need of re-analysis of the concept of social comparison, were discussed.